

特集

修復痕から製本を読み解く

明治維新以降の日本には、欧米の知識や技術習得を目的に数多くの洋書が輸入された。同時期に西洋の製本技術の導入も始まると、大蔵省内にある印書局は、外国人製本師の雇い入れを政府に嘆願し、1873年に横浜在住のW.F.パターンソンを雇用した。以降、西洋の製本技術は、水野欽次郎や徳屋敬忠、上原金次郎ら日本人に伝授され、国内に伝播していった。こうした技術の歴史について文字などによる記録が残ることは稀で、日本における製本技術についても、具体的な製本技術の系譜や歴史は明らかにされているとは言い難い。一方で、技術の痕跡は必ずモノに残るため、その痕跡をたどることで、技術の復元やその伝播を史的に考察するための証拠を見出せる可能性がある。このように、技術史を繙くには、現存する物（現物資料）による調査が不可欠となる。

今回、この研究手法に適した対象資料として、一橋大学社会科学古典資料センターと東京大学経済学図書館の西洋稀観書に着目した。両機関は、1950年代の同時期に、所蔵の西洋稀観書の修復事業を実施しており、さらにそれらの修復は、明治期に西洋の製本技術を習得した職人が手掛けている。つまり、これらの稀観書には、古い西洋の製本技術に、日本の製本家の技術が合わさっている。こういった西洋稀観書に残る日本の「洋式製本」技術を駆使して施された修復痕には、日本における製本技術の系譜・歴史を繙く手がかりが残されており、これを分析することで、製本技術史の研究に新たな知見をもたらすことが可能となるであろう。

また、こうした修復痕調査やオリジナルの製本構造の調査を通じて、書籍の過去の履歴を把握することで、資料の適切な保存や修復に役立つ情報を得ることができる。現在日本の大学図書館などに所蔵されている西洋の稀観書は、進行する劣化への対応に所蔵機関が苦慮している。修復痕から製本を「読み解く」ことは、単に技術の史的解明といった研究のための手段にとどまらず、こういった図書館の苦悩を解決する糸口にもなるだろう。

本特集では、「修復痕から製本を読み解く」と題して、4つの論考を掲載する。まず安形論文では、書籍に残された過去の修復痕を見出すための前提知識として、西洋の製本の歴史や製本工程といった技術面を概説している。続く森脇・床井論文では、修復痕をどのように見出してどう評価していくかの具体例として、東京大学経済学図書館と一橋大学での製本構造と修復痕調査の方法と結果を報告・分析するとともに、1950年代の「洋式製本」の技術の実際と修復の考え方について考察し、資料保存の歴史の中にこれらを位置づける。最後の小島論文では、上記2機関の調査に用いたカルテを詳細に分析し、現物資料（モノ）を「読み解くため」に必要な視点を指摘し、書誌学や歴史学におけるモノの読み解き方の意味（可能性）の考察に発展させている。

なお本特集は、日本学術振興会科学研究費による研究プロジェクト「日本の洋式製本の技術伝播に関する歴史的研究：洋装本資料保存のための基盤整備」（挑戦的萌芽研究，課題番号：16K12543，代表：森脇優紀）の研究成果の一部である。